臨床研究部からのお便り

第6回

新興感染症とワンヘルス(One Health)との関係

先月号に記載しましたが、国内での麻疹の地域流行は、沖縄では流行は落ち着いてきたようで、これまでのところ、16～22日の7日連続で新たな患者が出ていません。一方では、その後、愛知、福岡にて拡大したようです。これらの事実は、沖縄での流行は特別なものでは無く、1人の麻疹患者さんが出現して、そのまわりに、麻疹に対する免疫が無い人がいれば、どこでも、麻疹の流行は起こりうるということを如実に示しています。みなさんは大丈夫でしょうか。

さて、麻疹は大昔から知られている感染症ですが、最近「新興感染症」、つまり人間において始めて認識された感染症で、これまで知られていなかった新しい病原体が人間世界に侵入したり、以前よりあったもののそれまでわかっていなかった病原体、あるいは既知の疾患が新たに感染症であると判明したものなどが、これに含まれます。

今月、アフリカ中部のコンゴ民主共和国（旧ザイール）で、これまでで9回目となるエボラ出血熱のアウトブレイクが報告され、5月21日時点で、これまでに26人が死亡し、46人に感染の疑いが持たれています。現地では政府とWHOを中心とする国際的なチームにより、エボラワクチンの予防接種が始まっています。このワクチン「rVSV-ZEBOV」は、2014年から2016年にかけて西アフリカでエボラ出血熱の大流行があった際にギニアで臨床試験が行われ、高い予防効果が報告されているものです。

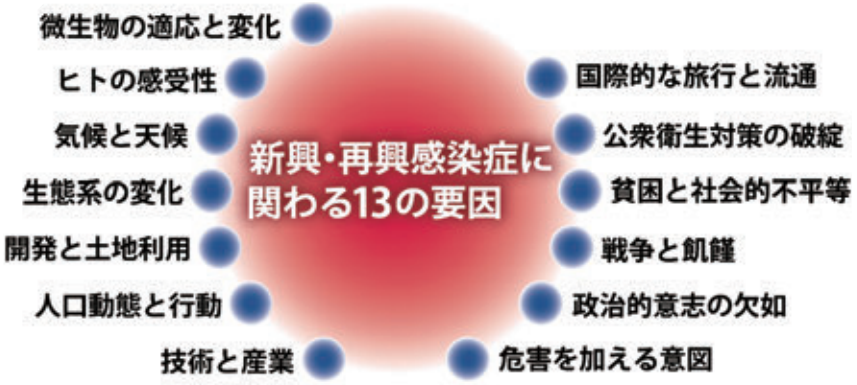
一方では、同じく今月中旬、インド南部のケララ州で、致死性が高い「ニパウイルス」脳炎が確認され、これまでに10人が死亡しています。ニパウイルスは1997年～1999年にマレーシアでの原因不明脳炎の流行の際に初めて発見された新種のウイルスで、コウモリから、ブタ、人間での接触を通じて感染しています。この疾患はこれまでワクチンは開発されておらず、治療は対症療法だけです。

最近なぜ、このようにたくさんの新しい感染症がでてきているのでしょうか。もちろん医学が進歩して、検査ができるようになったというのもありますが、実際にこれまでなかった新しい病原体が人間世界に入ってきているのです。そしてこの原因は、誰あろう、人間がほとんどの原因になっているのです。根本には微生物が自分たちの生存のために新しい環境に適応していくことがあります。しかしながら、人間は自分たちの生存のために、土地を開発して環境を破壊し、このためにそれまでは熱帯雨林でひっそりと暮らしていたエボラウイルスを外界に追い出し、気候と環境を変えてやはり動物や微生物の住み処を大きく変えてしまい、また大量の動物を飼育することによって、動物から移動してきたウイルスに生存の場を与え、新たな病原体を人世界に導入しているのです。

図のように、新型の病原体が出現する理由が13あると言われていますが、これらのうちの12が人間の活動が原因になっているのです。人間がこれまで行ってきたことを謙虚にとらえ、人間の健康、動物の健康および健全な環境は、お互いに大きく関連しており、人間の健康のみを考えているのではなく、これらすべてを健全な状態に保っていくことを考えていかなければ、今後も新しい病原体の出現が止まることはないでしょう。これが、いわゆるワン・ヘルス(One Health)の考え方です。

（臨床研究部長　谷口　清州）

［図］



図※IOM. Emerging Infections: Microbial Threats to Health in the United States. Institute of Medicine, USA, 1992.から筆者作成